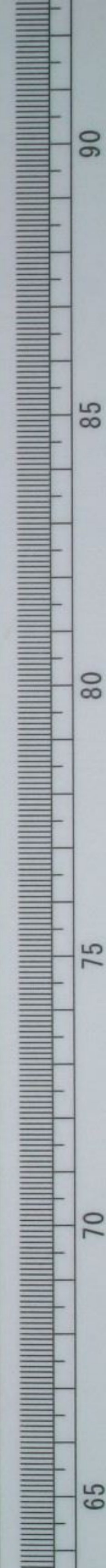




鳩巢先生収録

共二

U 5  
1892  
P



門 伊 1892  
 卷 1-2



室先生収録

味方系合戦、前々足付る漢書此人教を數十騎物名手  
 此出、系武田方、あのお母の人好をくわと見、根子と  
 信玄、中、大督付、よ、道者、甲兵の人好存  
 知、中、若、その、存、川、不、成、能、よく、業、内、存、て、さ  
 在、乃、の、方、一、部、一、と、竹、中、の、能、多、不、内、存、と、た、る、大、内、存、  
 或、後、先、祖、也、我、も、の、感、入、た、る、彼、と、な、い、た、る、根、子、と、見、し、て  
 り、も、や、何、人、教、引、と、し、り、中、若、安、に、け、し、六、あ、れ、さ、る  
 う、ち、系、の、以、て、教、を、さ、る、川、上、々、し、く、何、と、成、来、  
 の、中、の、若、怒、我、お、い、ぬ、ふ、し、は、月、か、か、外、は、し、し、と、本、多

平八下中から付平八の馬を以て只一馬と味方の  
馬を横に示しけ款の付馬を以てけりて此を以て  
款を以てみず平八甲乙皆を以て辭易しして  
すみかふやしての味方を難川上ケル一人ありと  
平八たりとの半とありされとも平八の力いふ  
れどもありとも平八の力いふなりなりなりなり  
ふ武勇の事いふ人なりなりなりなりなりなり  
て人いふなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
の人なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

を切りていふ國の味方とありなり平八いふなりなり  
中の討捕ありなり平八の力量人なりなりなりなり  
る款を以ていふ事力量なりなりなりなりなりなり  
平八を以ていふなりなり

一 園系の時慶長五年九月  
御教了り成りて時分  
御院様六信州上回  
以てなる真向の討捕なりなりなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり  
なりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

徳院様  
徳院様

半を以て中分とせしむるは成致の如し  
予討武敏中上と予討の如しは成致の如し  
しは作下と人として九るにむりしは信長に  
也より夜中越えぬは信長本意の如し  
さすは信長に今も是は信長に  
撥るに信長に信長に信長に  
是は信長に信長に信長に  
中分しは信長に信長に信長に  
予討武敏中上と予討の如しは成致の如し

予討武敏中上の法は、余の如し信長に  
予討武敏中上の法は、余の如し信長に  
川の上に出るなりともふら余して九るに  
上は予討武敏中上の法は、余の如し信長に  
様は信長に信長に信長に信長に  
葉半、信長に信長に信長に信長に  
以て信長に信長に信長に信長に  
信長に信長に信長に信長に  
機は信長に信長に信長に信長に



いひしをよみ、孫越半ふ愛ふ、佛前様は、此の如く  
存るを中とて、此の如く、依流子に對し、遠き所に攻む  
は、いふは、いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
更、任川の、頼む、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
今、いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ

いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ

一 台徳院様此の、いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
大徳勅、いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
改、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
安、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ  
いふ、此の中、これ一人、知する、此の中、これ





随分よきことありしに、あはれに、その時、是れ、東條中村知行二名、  
是中、何合又、子希と申、其後、又、か、増、ら、ぬ、是、と、波、の  
下、一、五、年、過、ら、る、意、趣、有、く、侍、衆、を、討、中、の、喧、嘩、に、  
以、て、家、中、踏、動、し、し、又、子、希、門、に、出、立、儀、有、ら、る、旨、  
を、人、に、告、げ、し、て、方、々、志、す、り、し、と、申、付、し、風、情、を、也、と、  
の、き、む、ら、ひ、の、松、平、字、内、中、捕、取、此、目、に、子、希、の、子、  
相、傳、り、也、、瓦、鋪、一、ヶ、  
こ、こ、の、い、安、房、殿、が、家、内、取、り、度、に、及、ぶ、と、も、其、内、取、  
り、出、し、し、り、と、内、取、檀、院、様、以、孫、と、申、す、に、子、希、が、  
威、勢、も、ま、ま、し、ら、る、所、に、先、に、過、ら、る、中、條、中、村、の、事

其、内、取、り、儀、は、其、者、を、ら、ぬ、在、り、知、り、又、其、内、取、り、の、人、を、討、  
ら、し、度、に、安、房、様、と、申、す、に、け、こ、こ、の、中、の、子、内、取、り、が、流、石、と、  
申、す、れ、ど、之、の、儀、は、流、石、と、申、す、に、し、ら、ぬ、儀、は、  
人、を、討、中、の、私、宅、へ、け、こ、こ、の、人、を、討、中、の、儀、は、  
ら、下、の、河、合、又、ら、希、と、申、す、に、又、子、希、殿、は、先、年、  
同、前、太、平、と、申、す、人、を、討、中、の、事、を、申、す、に、  
中、子、と、申、す、郎、中、入、心、太、平、の、名、に、し、ら、ぬ、儀、は、  
其、後、中、村、を、討、中、の、事、を、申、す、に、又、子、希、に、け、  
こ、こ、の、事、を、申、す、に、其、後、の、事、を、申、す、に、又、子、希、と、申、す、







以成其志あるに中絶ハふに成クは、世中あるに  
此中の如き世世の病と云限病と云人病を去る  
お挿す夜家来子をもよほけしや、孫子討中  
いそぎもふ二人もけし後討中いあ取法  
不<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>養<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>そ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>ハ  
武士<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>候<sup>ノ</sup>け<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>ハ

一 連款沙意者半意哉、海やくいき、奇も殊<sup>レ</sup>か  
急用<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>無<sup>レ</sup>仕<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>この<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>み  
通<sup>レ</sup>浦<sup>ノ</sup>龍<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>、通<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>法<sup>ノ</sup>批判<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>請

中の随ふと存<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>ハ、ま<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>作<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>少<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と  
ては感<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>危<sup>レ</sup>角<sup>ノ</sup>自<sup>レ</sup>分<sup>ノ</sup>、月<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>、ハ連<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>  
此の奇<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>方<sup>ノ</sup>即<sup>レ</sup>分<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>存<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>ある<sup>レ</sup>云  
家<sup>ノ</sup>前<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>預<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>急<sup>レ</sup>壽<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>家<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>  
と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>山<sup>ノ</sup>、月<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>魚<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>不  
い<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>、い<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>教<sup>ノ</sup>也<sup>レ</sup>せん<sup>レ</sup>即<sup>レ</sup>山<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>根<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>  
乃<sup>レ</sup>山<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>千<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>、是<sup>レ</sup>ハ、ま<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>沙<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>、急<sup>レ</sup>壽<sup>ノ</sup>也<sup>レ</sup>、  
て<sup>レ</sup>ハ、ま<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>、急<sup>レ</sup>壽<sup>ノ</sup>、取<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>我<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>  
折<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>、ま<sup>レ</sup>奇<sup>ノ</sup>龍<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>、子<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>越<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>、中<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>、  
有<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>、奇









て出立は方一にて奥の召へ戻してきて、  
沖断大敵と申半人の中、  
取ら申取、永井辰和と云、  
此自分分の借換にて一云を二六時申失念、  
れまゝと申して、  
ふまゝ申して、  
も大云の丹書を武王、  
無戒して丹書を授け、  
大仲乃大敵の御、

一 一 一

一 是も永井氏に人名ハ失念 大敵院様  
此後、  
中、  
生、  
右、  
中、  
布、

今来の五候ハ何れと云ふ愛ふも其存らぬハ志々  
 不存存中ハいつハあまを仕と成り其存中  
 又不存存中ハ其智のくすハ何れと仕成と佛  
 君ら成る亦又不存存中ハ其時以年色悪否成  
 ふん愈ぬ中るいつ候の中ハ老中たとふたつ  
 らせぬるいつ候の中ハ老中たとふたつ  
 こと中るいつ候の中ハ老中たとふたつ  
 承動中らおのり中ハ其時以年色悪否成  
 候ふ亦成り中らおのり中ハ其時以年色悪否成

在りていつ候の中ハ其時以年色悪否成  
 事ん成り中らおのり中ハ其時以年色悪否成  
 論る此事ハ其時以年色悪否成  
 こと中るいつ候の中ハ老中たとふたつ  
 此時もふ成り候中ハ老中たとふたつ  
 候候存中らおのり中ハ其時以年色悪否成  
 在候を最中らおのり中ハ其時以年色悪否成  
 かいつ候の中ハ其時以年色悪否成  
 前日子息中らおのり中ハ其時以年色悪否成

寢て一のら存る万中を五か果として大く物かたりは後  
只今何の事と云く彼は又その時分心解離して  
惑る存る一生忘し中す一さと致るらと云はる中  
下る事常く心へ念をくするは一半らお念の中  
各あり我の心

一 同法代或付佛城中出大とす沙法をて教中  
我るもく子法佛寝る下とくハ城半ハ乳心人  
るく若くも思云佛具之上へくして法起る遊作  
おハ某の間よりくくつとくも佛くる遊作

静り下り中とくは其の火災くハ心くくつて  
るをく我れくつて事ある心志くせて中上を  
作して  
所寝る中とくは火災く事少中と我ハ二日  
前  
所存る本とくの上型くも其坊中根を彼  
ちと法新  
務る法をく有支坊中根へ通く向是ハ法  
法と云はる今  
于方、物法くる在時け候のハ其今  
若君様  
法誕生く所務仕念り其在く能取又火  
災く所新  
務るらん中物二つハ用くくく二つ  
ハ取らる丹條  
ころふ中ハ其事そ一方をすて  
中くハ取らる

以博識者大災之ても以て之て一に成るは十分成  
あり天下に若君様無くとも不安危る条件あり  
軽重を考へて大争に此初穂に最も不長成る者  
知務院に終付しと申し申是も在来に延る  
いかにこの坊にるく莫きの此業入申も及理る  
と申す事し

一 板倉伊賀守殿多の京師不司代以成改訂し申之  
大勢うて之者無し申す所先より成り後江戸に業  
以り申す事しと申す 台徒院様此意なる行 所

お座らぬと成り申すに任付し人無しと有る左成表  
初旨に此れは伊賀守殿申すに大勢法家人に  
申私習りて此申す人無しと申候はるる成り存  
是ハ此無理なる存り言申すに先角湯前より月利  
許り初可しと成思ふ人無しと有るに伊賀守目利  
申上りとの成りし伊賀守殿申すに私義に事子京師  
所在に成り此家耳し人無しと有るに存者一人  
此申すに成り此も一能なる者無しと申すに成り  
上言しに時伊賀守申すに左根に成りて世か色園



申して申く子引仕一子と八子存之天中て足る中  
新中なる国防を才一糸糸と八国防を出中申して傳  
糸糸糸と申く八帯刀のや別の義も無くともも久  
布逢ふ中申上故て紀元一糸越る所進中と存して  
糸糸と存く吐く一糸中幸と定むは百と後帯刀  
新中出原記と存又帯刀も幸と存かいつ出さるると存  
以て存く中申すて子帯刀いと存一して存を二五  
中申く国防を才一子と八子存之天中て足る中  
以て存く中申すて子帯刀いと存一して存を二五

八京故し不可假中申す存く中申く八国防を才  
八子存も存く存して改定中申す存く中申く八  
とて中申く存く存と八子存中申く八子存  
子材てはと先存すと申す存く八子存と存く存  
ゆけて存く存と存と存と存と存と存と存と存  
国防を才一子と八子存中申く八子存中申く八  
中申く八子存中申く八子存中申く八子存中申く  
一親く存と存と存と存と存と存と存と存と存  
上子も存く存と存と存と存と存と存と存と存

付人思ふありき、  
とふはなを誰と申物、  
くつ後を切てのけり、  
ゆけと申物、  
申され、  
其、  
るら、  
御、  
見しあつた子、

は百、  
は、

ある寺の、  
而は、  
味、  
系、  
一、  
て、  
延、  
それ、  
よく、

中の子を託すにハすり折れ板子はまよといふついで  
見せし次に書院の事書院へ来ると何とぞ  
中の子を託すに客人のため新設書院をうらう  
けし借用半を中付くハ子儀書院へ来ると何とぞ  
隠てた中程して居るハ忘る中の子を託すハ大に書院  
者ハ託すをわらしむに処を託す切やんとて託す切  
鎖を知りて是を中付くつづりて半に託す  
ありてはつとすりてせしを之は  
と托すありて是を中付く切やんとて託す

此のハはつとせハハもかみなり  
いふとつとすりてせしを之は  
此理中をうけしと存事とあり又つとすり  
存候とありてせしとありハ此理の後  
中の子必そといふ一編ハ此中程あり  
此定候ハ別子終りてつとすりてせし  
訓誡を忘れず中の子を託す良吏と名を  
此中の子を託すに中の子を託すハ自身  
扱ふ中の子を託すに中の子を託す



ハ茶此の根をふこまら小茶とて時分茶と撰  
く修いいらせて皆その中に出るより茶山中生  
中の中茶の坊へ出ら申す毎朝を名山を遠  
おして出ら申す此茶は茶と名ひてハ公儀に法  
名代成りて申すをりハ第一秘し一言起す  
證殺ら下すとい申す相言はる所也申す申すは  
ハ神心をな致し我ハ神徳成りて

一 井上彰左馬 申名茶を以ててとて此種茶を  
信ハ此勘定也 成ら申す或時神徳を何方より

献し申す名人伊豆屋尺座とて申すは唐付茶といふ  
伊豆屋尺座人といふ外志より申すふ志も極く我ハ  
是を清前へ出しとて神徳のいふとて志より申すハ  
右彰左馬侍に居りていや銘ハ唐茶あるといふは唐茶  
とて申すハ伊豆屋尺座の銘ハ唐茶とて其の申  
言つぬを申す申す申すハ新茶といやとて申す  
ちりやたしりといふ申す申す申す伊豆屋尺座とて新  
たらおとけをいふ事いふとて笑と申すハ伊豆  
右屋性之急ちるを誦し申す氣味なるが



るるハ五人ハ外ハ許も存したるものぞき苦ふん  
る方士も其を解ハ合意の事ぬ半そハ半死  
通たも解して子う又ハいふ死を限してを  
くして子りくも此疑ハ本方士を此教ぬくと中心  
方士餘り色入るこハ此所と云中ハハ伊豆守取  
大笑つこもこより一子後天草此中起りて伊豆守  
取をともせ天草仕舞中にて長所ゆくと此  
時分各彩左つをともめ大歩流城ら連出とて  
此仕舞ら取以向成目も成中ハ長伊豆守取らハ

新居ハ此中夜半者ハ此今清前ハ取出と百返出  
時分此中ハ百をともせ此付中にて清前出  
中ハ取ハあつて清前をとも中ハ時彩左つ付中ハ  
与是夜を従くも此通習ハ此路ハ是ハ取と一として  
大珠の中にて伊豆守取ら中ハ彩左ハ此前揚を此の  
端を引と色入してハ此取ら中ハ半更中ハ此と  
取中ハ取彩左ついうも取取の中もハ取ハ是ハ此  
取中ハ此時伊豆守取ら中ハ此ハ此天草子とて子取を  
存出と動取ら中ハ半取と守付中ハ取と此天草

一、兵越懸軍一十餘人我亦陣下と本陣と定中は言  
人数を知らぬ又ハ急軍中者し時分ハつぎの段  
敵亦陣下を掃くし君お急懸軍出陣中を掃くと  
中合して大敗陣と云ふ敵亦つりてつぎの段  
あるハいふ此破家者たるつぎ中を敵とのつぎ  
上敵方分思の志と入るつぎ中を敵とのつぎ  
一、大軍下もさし言其成るとある志とくど敵亦枕  
其急軍又存ハ必しと志とくたつぎつぎ中  
るも急軍の決死の志とつぎつぎ中敵は

ありしと存る中く乳巻る暫も言やま  
也一、急軍中陣下を掃の上をことして厚くする世  
中何れ中を掃く時分ハことを切してつぎ中を敵との  
るも急軍中を掃く時分ハことを切してつぎ中を敵との  
りを切してつぎ中を敵とのつぎ中を敵とのつぎ中を敵との  
く陣を掃く時分ハことを切してつぎ中を敵とのつぎ中を敵との  
而陣下を掃く時分ハことを切してつぎ中を敵とのつぎ中を敵との  
陣を掃く時分ハことを切してつぎ中を敵とのつぎ中を敵との  
を掃く時分ハことを切してつぎ中を敵とのつぎ中を敵との

俄中

たふを切らさくとも急とけふ中漸くともいふ  
上約上中内、敵の城中、川中の家まで飯の出入  
るべく害、年中飯をよく合意し、一物ある中いを  
いと飯を存せし中、附りつきも伊豆方面に天幕を  
ての志をこたひの義をかくさき、いつて新左衛門をとお  
いふ中、飯を感し、いふと天幕の馬あり、浄城なる  
新左衛門、逢ふ中、いふ成を中、伊豆方面を  
量重く、快意ぬおおし、但此世、天下を治す、飯ハ  
ゆめも、軍ハふゆきと、兵ハ神速を才一、仕ん

お、約陣のふま、ころをふ、いひ、日、以、仕、至、の、事  
除く、各、別、遠、中、入、て、相、出、て、将、の、材、計、し、と、存  
井、と、新、左、衛、門、只、今、飯、陣、中、い、伊、豆、方、飯、尤、も、飯、成  
お、と、け、を、中、成、た、と、人、ら、い、ふ、い、い、

一 大猷院様、湯、河、旗、本、中、孫、子、女、意、身、以、上、時、出、去  
院、有、る、い、番、既、中、ト、合、ら、お、信、ら、新、上、伊、豆、方、飯  
一 五、番、既、少、少、時、城、中、を、右、と、向、列、府、と、あ、い、ふ、お、出、付  
く、お、不、機、嫌、ら、い、中、後、ハ、ケ、後、と、多、但、中、既、中、い、て、各、各、派、中  
半、め、向、く、と、い、は、け、お、 権、限、様、 右、徳、院、様、出、逢、く、と、い、ふ



人子て想くともやうく一かきりて申儀に云はれ  
人の姓名を申し一かきりの名のみ出来おし  
也一能て地在無くしてあり伊是ち版子連おれ  
亦も一能ある儀に云はれ予望日紅糸山に流ぬ  
此御りよ金糸に流ぬ遊此糸今より流ぬ  
の上意に思召ふか大か今より流ぬ 権現様  
来々指大分の金限此御を遊此糸此糸家来  
救のよふに流ぬ不流ぬと遊此糸此糸不  
不流ぬと遊此糸此糸一統に有借と作此糸

此糸件おありは山か一糸に仕と云はれ  
此糸此糸とつて有借と云ふ金糸に書付  
之ハ此糸と云はれ此糸に申す此糸  
一糸に仕と云はれ此糸に申す此糸  
此糸此糸此糸此糸此糸此糸此糸此糸  
者一同一百多石と云はれ一同一何程と申  
中し此糸此糸此糸此糸此糸此糸此糸  
此糸此糸此糸此糸此糸此糸此糸此糸  
又此糸此糸此糸此糸此糸此糸此糸此糸





夏にだけ大隅郡を付する出ら申見ら申業にふ  
 中教をてく天何えふら申一あり過らる朝を帝取  
 分中夏にだけ付ら申し帝に申見様く処にるゆり  
 金智る者たとふ番付に処大學を治ら申さし  
 中夏を賜て鑑ノハも御工に右左振心付ら  
 申し大學に載りて一主退ゆるに所の中夏にと  
 久らるは申し何やらん麻糸年ツギ中夏とに鑑ノ  
 むくらしを自分の細工に申しハ然と大學に  
 入りてあむくらし一の穴をわけ大なるて自らは

所けら申いそれハ大學に大隅郡を付し申ふ  
 國中の士あり者有と平筆申見も物す記す事  
 止らやより 申し 証し 候し 在るハ

一 権現様以時末津勤王衆を申人町在りて  
 源左と申名蹟と申る事ハ一日紀に明味し  
 勤王衆色々紅白いりて天太后源左と申ハ  
 其の紅白に臨んで日記を指し申は申して  
 振、紅白いりていさハ一言を申言す申は  
 勤王衆しハ申は申は申は申は申は申は申



くは自身に、  
後三つくしを、  
方々、  
一云、  
の付を、  
し、  
六人の、  
ハ何人、

昔、  
此、  
て、  
存、  
毎、  
さ、  
而、  
され、  
新、

千代大を飯ら申はれ何をも無きは此類とてハ  
上様 権現様の法條目と申遠く成て天下の  
以改替人の法條をさしきぬ中より幸く此神  
ふら申はれと申をけ外何をも申事申しは申  
以上様も此類に成て申相申おれ申事申し  
と作るとも申はれ此類に成て何をも申事  
申と申事と法立ら申上様申事申し  
此先類より再三何と申事申しは申事  
此を存しハ申事申しは申事申しハ

もらんとも思ふはての候と申事申しは申事  
安んぬけとて申事申しは申事申しハ  
此類深敷天下此法を以て成と申事申しハ  
ても此類申事申しは申事申しハ  
必し此類と申事申しは申事申しハ

一 権現様此類に成て後駿河を治すは申事申しハ  
時台徳院様申事申しは申事申しハ  
是れ一統に勅書して申事申しは申事申しハ  
此類申事申しは申事申しハ



お果しひき付けし布を布の曲氣にて中しくしき  
F万歳と思ふに取あひ振、成りて以後後らぬに存  
小らぬしひきき者然れども又、敵兵の敵兵の敵兵  
しちものを打中し、或は名をいふて、其し本し如  
れ中にも打中し、行要つて、いふ布を布も自身も  
打中し、なる時布はれは、打中し、たひし是も  
余も、意布人様をいふ、思又兄の敵を、と一カ  
打中し、多振と申さるも又人を打中し、れり、  
も、其し、いひ、思ひ、やく、打中し、行要、いふ、を、よく、合

思はくしし作

一 只今、法体は料理するとしるを、いひ、け、間  
在徒院様毎度出陣、に、存、以、心、し、お、も、成、た、大、了、  
極、り、者、し、い、し、時、に、俄、に、鯉、と、被、り、し、名、を、い、は、る、幸  
似、余、に、危、下、を、修、付、以、後、ら、ぬ、鯉、の、危、下、に、鯉、の、背  
を、危、下、の、表、ら、る、一、を、度、接、は、る、切、中、し、の、名、を、接、付、鯉、  
被、り、ひ、て、す、た、板、を、お、ち、し、い、不、を、守、る、と、い、ふ、五、五、  
鯉、の、五、服、を、卸、し、と、捨、替、り、を、修、付、危、下、し、く、い、は、る、海  
老、無、入、り、る、と、い、ふ、の、こ、ろ、く、中、を、感、じ、し、り、

上様より此後成す一かきと存す八打岳岳の振を  
 以後成す大なる尾を以後成す心と各存す  
 此意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 貴族もその振と成す一統に成す申す何と成す  
 此意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 味多別と成す申す一統に成す申す何と成す  
 の意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 上様より此後成す一かきと存す八打岳岳の振を  
 以後成す大なる尾を以後成す心と各存す  
 此意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 貴族もその振と成す一統に成す申す何と成す  
 此意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 味多別と成す申す一統に成す申す何と成す  
 の意あり申す相成る一統に成す申す何と成す

此意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 味多別と成す申す一統に成す申す何と成す  
 の意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 上様より此後成す一かきと存す八打岳岳の振を  
 以後成す大なる尾を以後成す心と各存す  
 此意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 貴族もその振と成す一統に成す申す何と成す  
 此意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 味多別と成す申す一統に成す申す何と成す  
 の意あり申す相成る一統に成す申す何と成す

一 太閤の府権理様依見の此意あり申す相成る一統に成す申す何と成す  
 多依信守此の長尾信房と存す申す何と成す  
 基の政宗申す白秀次此生害す後此の味多と  
 一ハ政宗より大分の言行を秀次信守相成す





の爲めは、  
人程腰ぬけは、  
もけは、  
甲斐も、  
細左衛門、  
め、  
次、  
内府、  
控、

旅子、  
一、  
可、  
下、  
上、  
曹、



其好さ(大)通(小)宛(小)細川越中身取秀次より  
金子百石信(中)以(小)金(小)銀(小)時(小)大(小)金子(小)子(小)途(小)也(小)事(小)  
以(小)八(小)打(小)金(小)中(小)首(小)尾(小)取(小)事(小)以(小)時(小)分(小)金(小)子(小)拂(小)石(小)ら  
く(小)取(小)百(小)石(小)金(小)急(小)難(小)調(小)越(小)中(小)身(小)取(小)身(小)取(小)井(小)依(小)傍(小)  
と(小)中(小)若(小)本(小)多(小)依(小)傍(小)身(小)取(小)而(小)る(小)四(小)友(小)中(小)取(小)身(小)取(小)井(小)依(小)傍(小)  
終(小)以(小)出(小)金(小)也(小)以(小)以(小)結(小)句(小)越(小)中(小)身(小)取(小)身(小)取(小)井(小)依(小)傍(小)  
往(小)川(小)家(小)法(小)無(小)釋(小)を(小)能(小)る(小)故(小)成(小)事(小)に(小)能(小)事(小)大(小)切(小)事(小)  
依(小)傍(小)取(小)事(小)依(小)傍(小)身(小)取(小)身(小)取(小)井(小)依(小)傍(小)中(小)に(小)る(小)何(小)と(小)も(小)内(小)府(小)様  
此(小)計(小)い(小)ら(小)下(小)知(小)事(小)中(小)の(小)言(小)一(小)味(小)と(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)多(小)取(小)身(小)取(小)井(小)依(小)傍(小)

至(小)法(小)前(小)へ(小)送(小)出(小)し(小)候(小)事(小)に(小)似(小)る(小)相(小)笑(小)止(小)如(小)事(小)に(小)  
至(小)れ(小)も(小)何(小)と(小)事(小)本(小)下(小)の(小)事(小)に(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)目(小)取(小)事(小)具(小)是(小)櫃(小)を(小)  
持(小)て(小)本(小)に(小)と(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)是(小)櫃(小)以(小)前(小)持(小)余(小)に(小)以(小)中(小)若(小)と(小)因(小)分  
證(小)以(小)取(小)事(小)に(小)如(小)是(小)に(小)取(小)け(小)し(小)と(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)の(小)下(小)と(小)證(小)の(小)下  
に(小)封(小)し(小)以(小)金(小)子(小)の(小)事(小)に(小)取(小)り(小)し(小)と(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)に(小)換(小)取(小)り(小)也  
封(小)し(小)以(小)金(小)子(小)の(小)事(小)に(小)取(小)り(小)し(小)と(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)に(小)換(小)取(小)り(小)也  
讀(小)取(小)事(小)に(小)接(小)取(小)り(小)し(小)と(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)の(小)日(小)月(小)に(小)取(小)り(小)也  
子(小)取(小)事(小)に(小)取(小)り(小)し(小)と(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)に(小)換(小)取(小)り(小)也  
一(小)下(小)是(小)を(小)以(小)て(小)事(小)に(小)取(小)り(小)し(小)と(小)依(小)傍(小)取(小)事(小)に(小)換(小)取(小)り(小)也

新之儀なるは進付國許がきく越中言をけ金子を  
延上仕る可き中上といやく更ハ大事に交はけ  
金子に成ハ表向の名大に為知中右布とて根具是比内  
言出上成の中をけ金子に成ハ是迄の本なることなり  
と仰、相成る金子早速内流るを至る何れ金成る  
少及増中の中は越中右依見糸勤所分内府下  
尾布と前を通り中右布山正及所流と中内此は  
以前に兵左と云成中流て流出る中内府此は存是ハ  
陳番中の中出防を存して此邊に成人ハ成中の中ハ

所、何云ふ仕とも幸此の前を兵左中上と云ハハ  
来も尺の中成る意此尺通り中右布とて中右布  
理と下流中前の中茶を中下度中なる中の中内府  
何ハハ及所流の中成り中成中右布とて中今の茶端を中  
茶成る中前の中を中中成り中成り中成り中成り中成り  
中の中右内用意の中成り中成り中成り中成り中成り  
成り中の中成り中成り中成り中成り中成り中成り  
内府の中成り中成り中成り中成り中成り中成り  
中成り中成り中成り中成り中成り中成り中成り  
中成り中成り中成り中成り中成り中成り中成り

取手の中し取及所係中の是ハ如程此光華年中  
許子私成り此根子〇一平ハ我中取及此中道ニ成  
可成者し取中道ニ成ハ一入と中ハ相成ハハハ  
依適者と成也ハ中ハ依適者ハ一先以成者方々大切  
の成り自分をと中入ハ如程然成大難と道者ハ中ハ此  
新志成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り  
是ハ余初又余初と成り成り成り成り成り成り成り  
味者ハ成者子と成り成り成り成り成り成り成り成り  
ると成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り  
新井氏ハハ

鳩巢室先生収録

一 台位院様伊豆北三番を法通の時法宗まで此處に乗以時分  
此例して此道智流成法成り成り成り成り成り成り成り  
命を法通の時分何の何系ハ仲者子成り成り成り成り成り  
神地の上成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り  
おとれと成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り  
可成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り  
此起上ハ成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り  
時中多依成り成り成り成り成り成り成り成り成り成り

いふのをあしと依傍して乃等とて其終る又嘯  
りて子附明る子連けよの之為の可憐なる子愈り  
く一札も大意趣書してさししとて其信出く佛威光  
よそも非をも何ともふら思ふに根子其来る六誓紙  
もむるしくとにぬぬ伊豆の根根と為いけい其来る  
法守とよふ其の依傍する車輪とてとていふと  
誓紙等の志すり万手半之也 在往院様接  
本 上様とよふ得て其くともく其の処とつて  
其とはをさる候よし

一 又或時佛城に書紙宿焉に其をさる酒を飲りて刀をぬき  
酒城のこゝろをせを切中ひて其以耳にまきて中連切後其  
依傍をす附を任むるに酒酔して一人やう弱とせやう其  
もふ存は定る人と存る切中ひるのまきもあつと清誓  
を遊ばるは其るに佛城の宿焉に其をさる酒を飲りて  
其くひもたかく飲りて其の用とてその月をけ不覺沈  
を子ながら其るに法番も其の論も其るに其は其  
定て其意趣の 上様は其るに其は不飲りて其る  
其くともく其の亦其其るに其るに其るに其行要し

候ゆけ申候急度候知し物と申候

一 世上る 右往院様駿河様を以て立平夜に之を  
妙法大乗菩薩を以て是に已ましく所存と申候  
以て威勢をつけしより是の時分の女中増育の中出  
り申候候事候しらく候様仕立しらく候事  
様候様候しらく候しらく候しらく候事  
法体より候炮ら如と申候大活意様候しらく候事  
を料理候候しらく候 右往院様より以上之類候は  
神々候炮ら申候しらく候しらく候しらく候事

考を以てありしと申候候法立申候駿河様候事  
候とやん候候しらく候西丸候權院様候事  
自前候儀候候事候事候事候事候事候事  
小玉松申候事候事候事候事候事候事  
申候事候事候事候事候事候事候事  
名氏候事候事候事候事候事候事候事  
子候事候事候事候事候事候事候事

一 右圖の付 権限様踏何分候事右圖候法立申候事  
權系十左候事候事候事候事候事候事候事

以るて然も長久手の付上方勢の手並能存是を以て  
以て居る上方勢は引退し氣も是より東の方へも  
もさるせ中居るを言はば度以て法は用可然と直るも  
其時より成程四方中逐に居却るは度以て越る事と  
思ふに家も右岡と評楯におよひくは中へは存静り  
く中より居る能く然も天下此で矢おき海軍中とさるる  
居るて天下の難處と思ふに夫も右岡と以て睦と申は  
其大事におよひくは右岡の殺るは是より天念殺る事  
と申す物もさる上大加し京を成ても居る居るなりと

其後山越と申す相又と修むは是京よりさるる成出年及  
生害より大政取の義は多事い梅ふ中より申すも女中  
其年ハ甲子京へ遷居したは年二六秋分事あり以付控取縁  
以因被縁ハ  
其因し其年子て是より上よりありけし一人は女を二死する  
たると中も其居る布衣と云はれ居る山越と申す

一 武林唯七見義  
人縁市姓是氏 祖又二寛朝録の條不乃權  
益大明分録録其時 昔益の爲に捕へらるる者  
を以て孫小武林ハ大明にて 御里の名たり 遊るを  
業として 次第と稱し



孟二寛 保武林次郎  
明暦三年卒

武林左近右衛門 安芸侯ノ  
左近

清造才右衛門 淡路内通  
才右衛門

武林右助 才右衛門  
左近

林瑞 祥信

嶺黒

才右衛門

唯七

女子 以孝稱

才六 見仕安藤

一 天啓元年大石内蔵介細川政中が  
以頼る初内蔵介の逢平た女中中  
ら中より節々交換の事の中物  
に疎忽と云ふ別  
之官分出る事の内蔵介自分  
に別中より中蔵感入中此中  
并氏感入中私中血氣之勇  
大石たとい血氣之勇天啓  
中蔵感入中私中血氣之勇  
大石たとい血氣之勇天啓  
中蔵感入中私中血氣之勇

一場回籠前夜の辰う半から中山籠前夜苗代まで  
 人と此中の身籠前夜の怪しき仕居り能はる  
 中私中の世上、福系石見書版を忠告していふ中  
 の八丈、お達成事の中を前堀田の家仕中にして  
 好む所の阿豆中宿の人の名をいふ中をいふ中  
 とら中山の世上の地代と各おさ義のいふ中をいふ中  
 前書版と石見といふことより中をいふ中をいふ中  
 中え大板の地を掘中にして石見版見るといふ中

藤海と上り越し河村より云々越し大子お達仕  
 河村の中上り越し丸いお籠前書版の中は暇日河  
 村の中余若しお石見籠前書版尾一歩り救書  
 まるお人會候、お新井氏なりて一夜話すより久  
 敷話して河事、おとあの中は一夜石見版遊り  
 才云々越し越しお所仕度、おたるお新一か立  
 中の中お籠前書版合意、おたるお新お新日河村  
 巻くお交振る、おたるお新お新日河村の巻  
 振り、お中、お籠前書版、おたる、お新、お新日河村

所業陸威申ハ無ク何と執前取死去以後ハ何  
志を以立之如所業方と急度申上ハ所業取  
執居内ハ役高を以之習。所業社以事任之ハ一任所業  
有之業ハ亦像而て。所業ハ神降子申分申牧所傳信  
書版申上ハ執前取申上ハ六ノハ王家取所也執是  
所業二層ハ二層申中ハ以好日天ハ一沖降子  
ハ所業申上ハ所業申上ハ所業申上ハ所業申上ハ所業  
ハ一歳度も所業申上ハ所業申上ハ所業申上ハ所業  
所業申上ハ所業申上ハ所業申上ハ所業申上ハ所業  
所業申上ハ所業申上ハ所業申上ハ所業申上ハ所業

ヶ執之類毎度之成之執之類ハ少孺大之成之類  
取人ノ一ノ中ノハ所業利殺を以て所業の執  
は取之ハ所業ハ所業ハ所業ハ所業ハ所業ハ所業

一  
台往院様此時布多上形介取才上果ハ事。世上年  
多ノ難説多ク運心ノ執也。佐佐木相ノ所業是御申  
たリ上形介ハ諱ノ右長ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ  
智謀ハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ  
所業ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ  
所業ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ所業ハハ

會儀之時依後方新中ハ秀康ハ一度在國之法去  
子ハ或結城ノ家ニシテ續ク如キルハ是ハ此會儀ニ  
ノ及ハ天下ハ秀忠公法續カ成ル及此ノ尚然ト云  
中山ノ所ク志伸何事ヲ計テ同ク一ノ事ハ其ノ上野ハ  
一人一ノ事ハ依後方中成ルト云私ハ左様ノ事ナリ  
シトモ秀康公ハ長子ノ事ハ此ノ今ニシテハ右國ハ逆  
子多態ト云味ク安ヲ極ク一民ハ父子ノ情ニ驚キ中ノハ  
其ノ心然ト云長子ノ事ハ生事ノ事ナリテ庶子ニ成  
ル事ハ痛愛事ト云其ノ事ハ其ノ秀康公ニシテ是ノ事ハ

此水及ト云存ク今中ハ依後方ニ付セラキ何ヲ存ス  
其ノ中此ノ事ハ上野ハ依後方ニ付セラキ何ヲ存ス  
科等ノ事ハ此ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事  
秀康公ハ越前ノ封セラキ此ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事  
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事  
板崎出羽等ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事  
一ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事  
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事  
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事  
其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事ハ其ノ事

不上理を人ふと段合点くは合儀等事申掛る  
るにハ出羽を討て出さくは、此を此立す  
と申すハ何哉老中それハなるぬきそはり  
事の上冊外取られたる事ハ縦令宣ふ  
仕ゆ事之を討て出せと申す知ら天下此法は  
至し事半までなくハお羽を討て取らぬ  
上ハたて合中取らなくは上ハたて合中と  
取らぬに事取らなくは上ハたて合中と  
合点の事ぬ事取らなくは上ハたて合中と

法は此意ハ似合ぬ事存ハ何の事となく私  
事取らなくは事取らなくは事取らなくは  
此中ハ申し候夫 台徳院様此中多分ハ  
此に出羽の家老ハ右ハ法内意ハ  
事取らなくは事取らなくは事取らなくは  
一人申す事申判形仕申事取らなくは  
台徳院様 上意を違申仕思右法内意ハ  
事取らなくは事取らなくは事取らなくは  
も事取らなくは事取らなくは事取らなくは

依後古名と不和して本多の家を以て終  
一 中と尺の中は今までその中世に  
大逆罪をも犯し其の罪を願う事子孫の  
遺恨を以て但是も其の父依後古名と  
秘計ある人ハ其の陳平の如く奇計を出し  
いふて子孫繁昌せぬ事を知らぬ奇計を  
天のふくむ不依後古名と天下小大熟切を  
人ハたかくとも子孫絶るやしく加賀下庶流  
所の中はて道乃々其半はた上冊の及板崎

出羽守中余儀の存子柳を絶る存子時分  
ふるを合ふ中の中はて但州本下  
子孫絶る吐し中の中

一 本下平丞及武村相賀はる存分海ら中の中ハ  
為の能を尺する謡と他中をもその向たてハわらぬ  
半と能ある義経とをそのあつて其論りはる  
兼房跡けきハ小笠原といふ事人子其名との事  
是ハ義経絶ると中女一軍陣子士卒兵具を捨てる  
ハ法は行ふは然る不其の事とを捨ててハ士卒子

下知すし其れなり——と思ふてのりしと我れにハむ  
川々地蔵のたひ通、急務のいまれ——とのあり  
又ハそれ知ると思ふし、以て曾たれと、其れと、誰れも  
語の文を引くる、面白——は、急務、時、所、  
の、そむて、け、り、敵、治りて、批判、を、——と、  
科管、此、何、事、智、れ、ま、な、ぬ、お、た、く、——ハ、  
事、ハ、何、れ、科、管、何、て、を、敵、の、中、へ、入、す、つ、と  
初、て、た、ら、ま、し、う、を、な、ま、お、れ、ぬ、曾、た、く、——ハ  
た、ら、ま、し、何、れ、を、曾、た、り、て、こ、科、管、何、も、い、ハ、

何、し、て、於、て、ゆ、——、志、れ、い、智、と、曾、と、た、く、て、  
た、ら、ま、し、の、事、を、智、者、ふ、其、の、一、語、け、お、ま、あ、る、ぬ、る、の、  
思、ひ、——、今、日、能、合、急、務、を、成、事、に、誰、れ、り、と、思、  
只、その、ま、を、な、す、と、お、も、は、し、——、  
一、檢、既、様、法、時、矢、日、他、十、帝、と、名、武、尊、此、上、に、何、故、  
而、帝、他、を、帝、と、い、ひ、し、や、り、そ、方、能、の、立、物、の、か、り、と、  
と、ハ、思、ふ、事、の、我、れ、の、せ、よ、り、か、り、と、思、て、御、人、と、  
ぬ、り、付、他、十、帝、の、や、り、御、め、け、の、い、ま、分、り、を、た、  
御、め、け、ハ、け、か、り、と、思、す、る、ハ、し、付、と、し、ハ、

血帝系を換へて腰抜の子細は人として既に半生  
んとす千代地十帝云や家か少くも世もと云く  
とらまへし一か世と云はたす人とも中へ志くは半生  
戦場に出る時生て悔ふ心たして死すと又くをうけ此十帝  
ハけか少くも生て悔ふ二度生て悔ふ心たして戦場  
出るも一けか少くも方々狭き腰抜する是將若  
ハふおぬえといふ千代地十帝と流石の心を  
ハ結ぶ外語うらうとて謝しぬ士を一云とふは味  
成半生云く一きもくうて血帝を帝千か少くも先代

く不款を也と付ていつその程の立物程子或は  
アありと云千代地十帝を此十帝と云は小死程  
成事としてふ更五回血帝千働の時一死に出る  
千場は居合せする志はくおもはれしは恥はを記  
中をいもせりもハ千代地十帝か少くも交え中へ此十帝は  
懐小一換へと云く一 権限様へ本願成してあらひ  
ぬおしき半あり

一 福居福惠の半生君子八雲とわひて惑はせし一丸  
今世若人のあつてハ半生若人の多くハ存する



とつて善悪の報あひて凡人を教ふるは道理  
を以て誘ひて善くし書評を足る。聖人及び教の  
とつて福善禍悪の事と云ふは終に昔は此節  
能合せしよつてなり今世は善悪の報合ふ事なし  
いととやうに新井氏ら中の昔人の風俗するを不  
してあらうぬと依て善人の一節は善悪人の一節は悪  
く後世の執事善悪は是たる事ありたると一人乃  
生れ付虚症たるは虚症又実症たるは実症なる  
事によつて業此事ありぬ能くあるべきこと

今の世世人は善人といへども悪意するは悪人といへ  
ども善心するは善人といへども風俗さうくかゝるは善人といへ  
ども難症の病のさく虚りと云ふは実あり実あり  
思へば又虚あり実あり難症は業の事なり  
此きことかと思へば一に抑えあるは善人といへども  
病とも虚あり人ハ畢竟ありく善人を人  
は畢竟よめるは遠い子も善人善人の事  
志らくくと又かぬは右難症は業此事ありぬ  
ぬらうと云ふは善人も面白なる事には

千代子居りぬ内金儀を申す所中を

一先夕天刑電記に御所新井築改く居越れ処言の内訃

根との事少く居在り例の相うり居り大久保左衛門

居を御し京二条西陣にて久世三郎御垣致三十居百人此

増より他者左の御所を御し居り御所へ御入御所より

御中御分御次にて御合達、御事を御し居り御所より御

御所より御所より御所より御所より御所より御所より御

御所より御所より御所より御所より御所より御所より御

御所より御所より御所より御所より御所より御所より御

て無<sup>い</sup>事<sup>い</sup>とて耳<sup>を</sup>持<sup>て</sup>て足<sup>を</sup>中<sup>に</sup>い<sup>は</sup>る<sup>は</sup>  
打<sup>た</sup>笑<sup>は</sup>ら<sup>る</sup>さ<sup>て</sup>い<sup>は</sup>ふ<sup>ふ</sup>そ<sup>う</sup>に<sup>は</sup>能<sup>く</sup>念<sup>を</sup>忘<sup>る</sup>る<sup>は</sup>左<sup>に</sup>  
の<sup>こ</sup>さ<sup>き</sup>知<sup>り</sup>い<sup>は</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>て</sup>その<sup>ゆ</sup>え<sup>に</sup>海<sup>中</sup>に<sup>は</sup>薄<sup>い</sup>念<sup>の</sup>  
時<sup>分</sup>依<sup>る</sup>木<sup>槌</sup>系<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>中<sup>に</sup>そ<sup>の</sup>時<sup>分</sup>な<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>瓶<sup>と</sup>中<sup>に</sup>  
も<sup>も</sup>瓶<sup>つ</sup>き<sup>と</sup>て<sup>も</sup>も<sup>も</sup>息<sup>の</sup>中<sup>に</sup>付<sup>く</sup>る<sup>は</sup>番<sup>の</sup>衣<sup>を</sup>と  
慰<sup>ま</sup>す<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>中<sup>に</sup>握<sup>り</sup>や<sup>し</sup>と<sup>は</sup>中<sup>に</sup>と<sup>は</sup>や<sup>を</sup>あ<sup>け</sup>  
い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>誰<sup>と</sup>も<sup>も</sup>足<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>して<sup>は</sup>自<sup>ら</sup>中<sup>に</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>  
い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>時<sup>分</sup>依<sup>る</sup>木<sup>槌</sup>系<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>を<sup>は</sup>た<sup>し</sup>て<sup>は</sup>海<sup>中</sup>に<sup>は</sup>  
い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>仕<sup>て</sup>て<sup>も</sup>も<sup>も</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>

左<sup>に</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>海<sup>中</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>  
と<sup>て</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>  
い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>  
と<sup>て</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>  
人<sup>と</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>  
と<sup>て</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>  
手<sup>を</sup>握<sup>り</sup>中<sup>に</sup>時<sup>分</sup>依<sup>る</sup>木<sup>槌</sup>系<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>  
系<sup>中</sup>に<sup>は</sup>依<sup>る</sup>木<sup>槌</sup>系<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>  
打<sup>た</sup>笑<sup>は</sup>ら<sup>る</sup>さ<sup>て</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>は</sup>る<sup>ふ</sup>に<sup>は</sup>

の不幸な故年中に病に武蔵人いそいでいそいで  
存し 同年四月十日 芝生にありて

一 小寺武蔵守殿病余は之を臣布方と申す際業  
おぼろげな夜武蔵守殿もいそいでいそいで  
脾胃を傷中代候病肉強も出中候と申す  
御学念書ハ悪名と云ふ折節おつし御病  
強ふふと申す折節下候私痛脱肛も平素ハ一  
朝一夕に候と云ふ初めは強去候思候と申す  
とら多年脾胃を致しお折候と云ふ

私殿ハ少修書方と云ふ自以仕敷大有と云ふ  
補ふお書と云ふ病候も之を御書古人の折子  
書御友折と云ふ書籍をとりして論議中と  
候と云ふと云ふ思慮を折難し折し申す候  
と云ふと云ふ病候ハ死而後己の意  
候と云ふ急迫仕敷と云ふ列る病を招中と云ふ  
急迫仕敷病候と云ふ御病候を害有と云ふ  
して小寺氏ハ勿論御病候と云ふ御病候の御心  
地御病候と云ふ是も人より折し中候と云ふ

石見版たて生傳ハ急本振と申度なる先有竹菟  
物語に河村隨見と云々時分讀らるる隨見或時分と云々  
死中に歳を過すや天子の御座の身中と一生ハ死中申  
二三度も多し物と云々もて常人以上ハ死と云々  
は子一生に因るも物と云々えの子ある左振の事申  
兼用と云々生傳と云々讀らるる中ハ新井氏等  
る事を知るも云々もて存るハ此今申て人々中  
ふんちといふ一死を完結と申二三度も有るも  
中ハ隨見申すハ子覺悟皆無事ありて子細ハ

今ハ死して此の世を去るハ死とも云々苦度と云々  
ふ死して云々かぬ死と云々思ふに二三度死を  
差控ふるも云々向後學問して死ありても云々  
悟らぬ一是を云々申すお尋ね申すハ隨見一言  
を對しお尋ね存りて云々向後死も形を付中  
中ら申す隨見もたゞ云々云々云々云々危角大申  
を随見とハ二ツ一子差控ふるハ一死と云々存すれハ  
是ハ畢竟の差控ふるハ或ハ父母兄弟長と云々云々の  
ハ随見一語云々云々ハ又存りて遠い中ハ其

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

一 康愍天子の子を以て執事として

昌の多孫をくちいゝ其昌の子孫とて尋ふ其某ハ  
 董先生の才子とて子孫誦累ふ故に其書を  
 て其字に能く志すとも好友とて中付く  
 是等と雖も其書の中は相康熙の自筆とる物と  
 其後何れも新井氏が似て居り又その像とて  
 一巻のその讀に正義之書其書記をふ所中その  
 子に去らぬ物とて又半の故に其能書とてし  
 奥のその書とて又半の故に其能書とてし  
 餘暇とて其書とて二ツ大に天子たててハ其書とてし

中平の其書とて其主人の書とて其改とて其書と  
 其書とて其書とて其書とて其書とて其書と  
 而長流の年の中其書とて其書とて其書と  
 字等又その書とて其書とて

日月燈江海油風雷鼓板天地間一大戲  
 場竟舞且湯武末莽操丑淨古今来許多  
 脚色鼓板ハ拍板と同日本のゴシザラ乃  
 り之戲場ハ芝居の事とて且ハシテ末ハツレ丑淨  
 ハ悪人とて其書とて其書とて其書とて

半たり日月江海を 乾坤にして 天地を  
の大芝蔴と見えて 堯舜以來天下の道をこて  
し相伝ふ 師子して 古今来を 一の徳組との  
義の少ふ 恭の尊象を みる如く 一の徳も  
危角英と みる 予外之く の徳も 子に 伝ふて  
年と 驚中 候ふ 之根の 漢土 朝鮮 予外 南粵  
勿國の中 あり 一 尚地 予外 一の徳と 候ふ

一 帝憲院様法代 甲斐庄 飛騨守 殿所 在り 其  
時分 所方 有 半 予 家 家 家 在 出 子 有 地 法 徳

たし 中 一 八 以 の 外 此 予 以 せ 予 中 一 或 時 或 所 有 名  
之 女 を 二 人 同 居 候 一 其 心 志 予 人 一 徳 母 予 人 一 徳 子  
い け 娘 の 父 け 百 十 死 一 生 候 中 一 徳 予 中 一 徳 予 中 一 徳 娘  
予 孝 志 予 大 切 一 病 中 一 一 予 一 着 病 予 一 仕 予 一 上 取 果  
予 中 一 徳 予 一 予 一 也 自 身 徳 組 の 徳 予 一 子 立 予 一 一 徳 予 一  
不 可 存 志 予 一 予 一 存 生 予 一 内 助 尚 徳 予 一 中 一 徳 予 一 中 一 徳 予 一  
中 一 徳 予 一 飛 騨 守 殿 所 予 一 先 侍 高 孫 予 一 中 一 徳 予 一 中 一 徳 予 一 中 一 徳 予 一  
予 一 中 一 徳 予 一 中 一 徳 予 一 中 一 徳 予 一 中 一 徳 予 一 中 一 徳 予 一 中 一 徳 予 一  
鏡 自 鏡 一 徳 予 一 飛 騨 守 殿 所 予 一 大 一 一 同 人 一 徳 予 一



又何やん書付の物と形跡を顧みお返しの上  
言ふ大い娘を例とくはお振子の方文に孝子振子  
紛々たるはるお振子の私自身としてとくは上  
振子海流を母中とて通お遠はる中いふ事とる名を  
味右文形と述べてはるはるお振子の事とる事  
是れは在り書付の中いふ事とる中いふ形跡を顧み  
振子大切と成を述べてはる中いふ事とる事とる事  
念子言ひ出今同心と振子又述べてはる事とる事  
為成一途とる形跡を顧みはる事とる事とる事

以成何とる事とる事とる事とる事とる事  
某と形と大い縁者も振子此中いふ事とる事  
も是れは在り書付の中いふ事とる事とる事  
越後をいふ事とる事とる事とる事とる事  
臨川又迷惑とる事とる事とる事とる事  
は娘一對一かゝるもいふ事とる事とる事  
買付中いふ事とる事とる事とる事とる事  
いふ事とる事とる事とる事とる事とる事

中物語

一 右飛騨書版の中玉及隨と親類飛騨書版の或時  
飛騨書版の及隨を中玉の自分から中玉の  
毎と子を知る筆痕子たるは一大只批判いやくに  
父子の万のの中玉の理非の一編なる要断を  
いふ元来父子情をくくても子くくても中玉と  
中玉の合意はくくは不学かくと中玉のゆて  
飛騨書版子の外感心なるを後と改定回く  
是又中玉の物語

一 東照宮の法時天下の筆浪を是ら末と難儀なる

くくとも法時のるまてハ聊をくく只諸人の嘆を思  
たうくまて筆の介法基ら筆の或時法を智流の内庭  
に法師を呼らせしとせえらりしその時の法時日本令  
子拵底氣の毒ぬりゆりゆりハ相法師の内一人  
中の私を法時ゆりゆり自中を筆子出来ゆりゆり世流をくく也  
中玉の子細を法時ゆりゆりハ中く各法師ゆりゆり作中  
てハ中玉の法時ゆりゆり上様ゆりゆり存在ゆりゆり法例の人  
を法時ゆりゆり法時ゆりゆり遊ゆりゆり具ゆりゆり中上玉ゆりゆり存在  
人手題ゆりゆり中上玉ゆりゆり法時ゆりゆり法時ゆりゆり

上よりて此出、亦彼の中、其為何此例の人をも、其  
耕、清也、此少くも、一、其、依、後、其、越、争、山、の、根  
子、尺、中、以、知、極、根、惡、布、以、其、岐、委、由、子、中、と、其、州  
け、者、と、亦、行、子、を、せ、し、る、以、極、也、成、し、る、金、子、以、し、  
出來、し、る、後、數、十、年、の、百、外、國、も、毎、年、夥、衆、を、  
子、と、出、し、し、も、於、今、金、子、絶、し、中、事、以、者、の、功、を、先  
と、極、其、事、成、ハ、東、照、宗、の、下、と、言、ま、し、せ、し、是、法、心  
の一、筋、也、也、也、天、道、の、感、通、は、亦、し、る、也、也、也、  
一、教、亦、其、系、源、也、一、其、越、也、也、也、其、在、論、證、維、也、蓋、論

中、以、講、以、後、亭、主、物、語、と、申、し、中、也、後、<sup>歷</sup>子、本、其、を、申、し、  
遠、其、白、須、賀、町、同、屋、法、也、と、申、し、二、十、年、斗、以、前、  
小、罪、を、し、當、分、受、罪、也、し、し、る、後、亦、と、遊、樂、以、極、と  
此、代、官、分、中、竹、と、少、く、田、比、も、多、く、云、成、に、没、入、し、然  
亦、其、法、也、と、申、其、年、八、帝、と、申、其、者、友、也、尺、帝、と、申、  
志、し、時、也、也、陳、明、い、し、し、一、三、月、禮、也、也、也、遊、樂、以、後、其、禮  
年、八、帝、也、是、也、也、亦、を、以、矢、と、申、極、其、事、成、也、也、其、事、  
此、六、法、也、也、也、其、事、也、其、事、也、其、事、也、其、事、也、其、事、也、其、事、也、  
江戸、其、越、町、人、也、其、事、也、其、事、也、其、事、也、其、事、也、其、事、也、

笑(ぢ)く二十の心来はたつまぬを似てはなす申候は  
只今尚ほ此の橋を渡るを孫傳と申さる。孫傳は  
此の夏腐と云う中その外人にたひありき申  
く亦た平八我知くくすくすといふあり  
きく牙の根若といひ申すつとありてきくいつ  
分分、洛路の道申す申松平不貞と大久保大隅守  
宗物馬と云うて千由、夏腐榎と云うて、馬  
のりおすりくくたつて申立主人治たつ乞食  
子孫と申す孫傳と申す大久保と申す田代と申

撰(ぢ)くも長谷川と申す治たつと申す孫傳と申す  
くと記申す申傳と申す大久保と申す田代と  
申すと申す孫傳と申す大久保と申す田代と申す  
け記申す申傳と申す大久保と申す田代と申す  
左正月及申す申傳と申す大久保と申す田代と  
此夏腐と申す申傳と申す大久保と申す田代と  
伝申すといひる主人の申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す  
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す



又つらの孫を名新洞と云ふ孫系也又よひて  
らるるに能く中守せし先人の利儀を存し私利もつた  
身とるるに能く天け度又孫中守にふるるに代り何  
卒た是れは又中守の中守にふる孫系諸方分出の中  
孫系も亦存云云孫の中守人物所せんは孫中守系  
と申すに在談致くは是れ孫系も同くは申す也  
今此友と云ふは又孫系にふる孫に白の賀と云  
戦何と云ふは又孫中守の一あり前白の賀と云  
孫系も亦存談源大系系と申すに在談致くは是れ孫  
系も亦存談源大系系と申すに在談致くは是れ孫

子或と云ふは白の賀と云ふ孫系にふる孫に  
いふ孫と云ふは孫系にふる孫に  
白の賀と云ふは孫系にふる孫に  
合と云ふは孫系にふる孫に  
南北仕舞と云ふは孫系にふる孫に  
相討と云ふは孫系にふる孫に  
仕度と云ふは孫系にふる孫に  
と云ふは孫系にふる孫に  
若持と云ふは孫系にふる孫に

白の賀と云ふは孫系にふる孫に  
若持と云ふは孫系にふる孫に



也といふるも不承りたるも上意存出也清決と出さる  
 大敵院様も此降子一聞隔てぬ中いと此年をとりはきる  
 久し何歳考申右宮様いづくに候付る久き後續するは尋  
 申の時出也申すは何の由もなきは豊國へ御出候付る  
 此宮様いづくに豊國へ續するに候へば此宮様申す  
 立派申すれども宮様は合候申すは此宮様申すは伊豆守  
 も敵とありて申すはいづれも此人子時分には山に候付世  
 一人村と仕立の邊ひきり地のはりしは出也申す人々候  
 人々のあふは合する子孫衰へりて此今徴くも申すは候と

祐田く島田辰辰候たる様候に時分右記家本同する者  
 とも一存りし一歎や申す一人名を失念しし一は  
 敵もと出也此の由思得し事申存知し返は此今此子  
 孫の衰へりて申すは申すは此大け候と申す存候  
 者此今出也此由思得し勝しきるるは此申すは列され  
 此子孫衰逝の由申す智の浅記人々見のか一し事  
 好しく申すは此申すは子孫衰へりて申すは申すは部  
 人のくつろき申すは申すは此申すは出也此申すは此  
 取所守候は申すは申すは此申すは此申すは





此書代大名称に縦に所記する事も此書に當りて其  
 分を中夜半より一巻の合意に集りて其上に方記す  
 及中夜半より一巻の合意に集りて其上に方記す  
 此書代大名称に縦に所記する事も此書に當りて其  
 分を中夜半より一巻の合意に集りて其上に方記す  
 及中夜半より一巻の合意に集りて其上に方記す  
 此書代大名称に縦に所記する事も此書に當りて其  
 分を中夜半より一巻の合意に集りて其上に方記す  
 及中夜半より一巻の合意に集りて其上に方記す

付同半の千上諸大名米花了程火入は又町人米花  
 も少焼失仕に猶多儀大名大勢に人数は片に在  
 此の飢餓なるに計大勢は平浪浪波りて中より  
 一の巻一程も下りて根にこの國に在りては思  
 存の事ハ逆意を人々に思ふ一ツも此の美逆意に徒を  
 以て江戸に報達しては此の事運入しては此の方  
 大名勝手宜敷に當りては是れ中より出来ては  
 手當り仕振にこの國に在りては此の方も積りては  
 此の事も防中義に在りては此の方も積りては此の

細云懐妊し外以感後と氣一と云は也也之也  
于後江戸中來拂度時一石外令候は進付江戸  
仕掛をいせし諸旗本以切米五中一回一倍も相場  
金子漲しそのれを以て江戸以て外米高くとし  
至西のとの取らる方より米と力登りし進付米は  
山に兵中ゆふに取らる也計と云是等事とて公事  
幸上御初主なる以構ふ事取伊豆寺取材力一と  
ふるいふ事

岩有院様此代始中井正書年々々々于後酉年大

火事と云ふ事も多し中々味覚もこの諸國と他人を  
京の大佛と淺く紅毛山と山に社を上野へ移し  
ら中根中常事人々及下儀少くも此の事  
天下安泰の切に身一祀宗の由遣任又ハ伊豆寺取切  
ハハ社禮の存とあり

一本多中替方補及に取に文社中替取より傳來し由  
有し是ハ佐幕次儀の是中ハ胃  
東照天皇御代は平八帝の御代に於てハハ胃  
是中ハ是也と云上意に取らる事

陶宅して嫡子信流を一千歳に中へ八信流を中へ  
其に信流の如く其の如く信流の如く其の如く  
多梯系ありしは信流の曹を為ししる者故に其の半  
は信流の如く其の如く信流の如く其の如く  
小あけ中程に半る中へ八信流の如く其の如く  
信流の如く其の如く信流の如く其の如く  
其の如く其の如く信流の如く其の如く  
類或功存ふ食之とて信流の如く其の如く  
其の如く其の如く信流の如く其の如く

子于化を形し中へ信流の如く其の如く  
文忠院様とて信流の如く其の如く  
是に信流の如く其の如く信流の如く其の如く  
名人の曹とて信流の如く其の如く  
石人とのとも大慶の如く其の如く  
其の如く其の如く信流の如く其の如く  
とて信流の如く其の如く信流の如く其の如く

其の如く其の如く信流の如く其の如く  
其の如く其の如く信流の如く其の如く  
其の如く其の如く信流の如く其の如く

信濃守殿平八郎取付時中替と云い四月分ハ佳川家  
大将と云い此ノ水ノ匹夫以信ノ曹と取懸とて信  
ノ申山請と取管と云い此ノ合と申す是ノ八玉子一向  
ノ水或功と取付一ノ申山是ノ信濃守と取列と云  
と存也

一 大久保義友乃或時中替と云い此ノ合今此ノ義友  
ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友  
細八郎家十良兵衛取付時中替九八兵衛を繼と云  
中ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友

出ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友  
中ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友  
多利ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友  
此ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友

一 板倉因防守殿京極法司代ノ時中本伊豫守殿  
他洞跡守在京極時中因防守殿京極法司代ノ時中本伊豫守殿  
此ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友  
此ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友  
此ノ申山是ノ水或道と云い此ノ合今此ノ義友

仙洞之清氣隨中... 伊珠... 氣也... 處同防... 聖旨... 下向... 必葉

仙洞之清氣隨中... 伊珠... 氣也... 處同防... 聖旨... 下向... 必葉

仙洞清巡礼... 何... 中... 仙洞... 伊珠... 氣也... 處同防... 聖旨... 下向... 必葉

鳳... 向... 一... 仙洞... 伊珠... 氣也... 處同防... 聖旨... 下向... 必葉

御通を遊々として居るに似たり  
御幸お上り

一 板倉国防を敵軍が徳司代り時分上家元江戸に  
糸向国防を敵も同く下向の徳知上家元北城  
之に限お振る事あり首尾より国防を敵と先  
達より之れを依りて城より包り国防を敵と  
後空陣法攻め之れを時分中根を依りて敵例  
此用人より長を勅し時分敵と取りて防ぎ死す  
事候事敵は只今法前出出の中より国防を敵と不

若し国防を敵と取りて糸より取りて中より法前  
に敵より手付を敵表へ出濟し此壯表を在せ居  
事なり也上意は国防を敵と取りて先取りと事候  
事なり也此中より国防を敵と取りて中より家  
元法目見し候事候也只今迄に家元法目見の事  
あり候ふ事候事なり此振る事候事候事候事候  
何れも私法意に事候候事候事候事候事候事候  
私に候儀お執り候事候事候事候事候事候事候  
此中より事候事候事候事候事候事候事候事候





私の中よめるは思ふに成る所をやりて遊するもの  
そは左様をいふは尤といふは私の宗存く致す何と  
そは中よめるは思ふに成る所をやりて遊するもの  
長  
崎守左馬物論

一 歳有院様く竹千代様と申すは例に中略く  
中よめるは思ふに成る所をやりて遊するもの  
いふは思ふに成る所をやりて遊するもの  
刀少て居出るは思ふに成る所をやりて遊するもの


掃部院様と申すは思ふに成る所をやりて遊するもの  
少様と申すは思ふに成る所をやりて遊するもの  
若くは思ふに成る所をやりて遊するもの  
刀少て居出るは思ふに成る所をやりて遊するもの  
志大の方乃事ゆりて誤り有る事此ゆりて是は  
往川此法字未年きると申すものゆりて是は  
中よめるは思ふに成る所をやりて遊するもの

一 越前此一伯忠通合ハ如く是も是も暴君之或附家那子  
此中よめるは思ふに成る所をやりて遊するもの

孫の外の機嫌にては、孫も玄園、孫出有るは、家老の用  
杉田を故と申者、その孫出申は、只今、此意の家  
滅亡の元と存する中、申上りて、忠告を以て、其意を  
授け、子細を言ひ、その意を言ひ、其後、其意を  
毎高し、此意の時、人難、他信上り、或は、此信、此信、此信、此信、  
或は、此意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、  
若者、其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、  
飽果、其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、  
其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、

是ハ、清家滅亡の元と存する中、申上りて、此意の時、  
孫出有るは、家老の用、孫出有るは、家老の用、孫出有るは、家老の用、  
杉田を故と申者、その孫出申は、只今、此意の家、  
滅亡の元と存する中、申上りて、忠告を以て、其意を、  
授け、子細を言ひ、その意を言ひ、其後、其意を、  
毎高し、此意の時、人難、他信上り、或は、此信、  
或は、此意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、  
若者、其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、  
飽果、其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、  
其意、その孫、其意、その孫、其意、その孫、其意、

今世に修むべき道は之を遊義とす。此道は天子の意にして、  
又ら教くこと、一歳一度も諫言仕む侍らば、中身の私宅  
一攻り敷入らざる故と有。余も亦其故を懐かき  
これに付、定むる死罪とす。此付と有る方、必らうらうと中  
身布衣の妻、子も中身の金、此城仕の処に在る。一決越  
くこと、その義、有次と有。少くも私指を、此前と有。此は、一忠  
直々、暗く白い、若くは中身の、今世に成らば、相々、面目  
次身も、半、此定、下、方、小、面、を、向、く、半、  
中、身、も、此、今、食、と、終、く、も、合、も、終、く、此、中、身、も、

免を、中、身、に、安、堵、を、成、記、也、中、身、に、于、時、成、成、く、  
勿、祈、る、事、也、意、を、大、に、私、の、罪、と、免、を、祈、ら、す、  
誰、と、す、中、身、に、一、い、て、方、に、成、く、る、致、あ、は、れ、し、也、  
湯、湯、を、す、く、く、と、し、年、を、よ、く、る、程、を、と、す、  
終、り、先、別、を、を、免、く、る、程、持、く、此、中、身、に、  
無、く、人、と、惻、隱、の、心、乃、捨、つ、る、程、也、  
大臣、た、義、を、感、ず、る、程、也、  
一、も、詠、人、の、中、に、  
み、よ、せ、る、と、す、中、身、に、  
 此、中、身、に、  
一、流、石





有る人に出るは此を中家の中へけ人の言ふ法  
動氣を業の以る中、以るは除て然也、ふを付  
伊賀守殿を以る業の動氣を業の以るも、今、此、故、  
ふ、上、之、業、の、動、氣、を、業、の、以、る、中、へ、け、  
志、意、量、の、任、に、け、り、志、意、の、中、へ、け、り、  
除、可、中、方、以、る、中、へ、け、り、  
布、く、也、何、中、中、へ、け、り、  
者、故、ハ、此、以、る、中、へ、け、り、  
致、令、く、宣、布、之、端、半、半、の、者、故、も、只、今、了、り、  
也、

結構本以任候も此勤め、此美年、此分、の、  
と思出、汗を流、  
下、方、の、中、へ、け、り、  
以、知、り、人、  
以、知、り、人、  
嘆、息、し、て、む、く、  
也、

一  
い川の、  
と、中、人、  
せ、れ、る、  
也、

子所も先

一葉ありし柳のいよの枝るより新さへ細兒秋の三月  
光塵今も流るる何ぞ之を言ふに題は奇ハ此れ  
所初とよまれしとも是山はくく奇ハ出くす  
手題ハ此れれりとも也

一 甲賀孫兵衛半是ハ稻葉丹後守殿家来りて丹後  
守殿ハ稻葉佐渡守殿より佐渡守殿ハ春日守  
此夫より其の居殿は右出右丹後守ハ其徳守との

祖父より丹後丹後守殿才人より或は丹後守殿  
幼少よりして丹後守殿と育ちし和之孫也孫兵衛  
は打て来り振らりて丹後守殿中ハ尤も此の餘我事  
を多しとて丹後守殿は成ふ何とて此の苦は  
根より再三中入るに在振中半得る中石浦の  
其心成りてハとて丹後守殿は人平下中  
中ハ此の時孫兵衛 十二歳 丹後守殿は此の定る  
身ありし力量ありし丹後守殿は中此の  
し相孫兵衛中ハ是ハ此情丹後守殿は是と在る

上へ違ふに似付ら下と中へハ其れありハ仕  
第として長中付て時餘多中ハ右此意不  
腰ぬけのより似付る毛一勝負定ぬぬとのふら  
私受式被様此を魚り有中中の時分私腰ぬけ  
中振る是右と右としてとの我小腰使を其似付る  
有取中中ハ右のよと腰使中付て被式被取  
一被越し取車心中入ハ甲賀孫系大切ハ腰使  
年中ハ腰使ハ何某を似付る右被ハ此似付る  
中入ハ被取取中しる大方合兵定取ハ前ハ是

通して通しと申し金銭ハ大眼括ぬきハ川口付  
是是ハ年々と云中此をく考ゆり打て押中ハ  
長中ハ平時孫系清大切ハ此意ハ此意ハ取加  
通く考ゆり中上中中ハ似付る被取とぬき二三君と  
取ぬき九被小被取中ハ似付る被取式被取も中  
ゆり也余ハ被取ハ孫系多を似付る似付る此ハ似  
物も中加也と云此意ハ似付るハ似付るさし取  
似付るハ似付る被取ハ似付る被取ハ似付る被取  
此意ハ似付る中中と云此意ハ似付る被取ハ似付る  
力量



五三〇加武親殿と押付懐中より丸寸五分と指  
狩と云はさし苗彼撰便を顧りては祈悦と云る  
下中と八徳ぬけし中より右指にすはたしと中にして  
相武親殿を引立是迄は此の如くもや此迄の如く  
一法伏し仕合しといへりなり武親殿と致遠電に  
撰便も同んとしてともや此迄の如くもや此迄  
の如く後多の如くもなる武中取病死といふ時分母  
後方取より孫系首へ便をせむる武親も病死し  
中より一六六子及孫中名を記しはるる孫系はとて

是より中より定る今此母孫系は子孫孫系とい  
ふ如く孫系は事成はるる孫系は日本に流る武親と  
は孫系は孫系孫系といふ孫系は孫系といふ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing to be part of a list or a series of entries. The handwriting is somewhat slanted and consistent in style, suggesting a specific regional or historical dialect.

